模索する“人間像”と体育の価値

在 国 寺 英 基*

(昭和51年4月12日 受付)

The Groped Image of Man and the Value of Physical Education

Hideki Zaikokuji

(Aichi Gakuin University)

1. 本稿は、現代の混迷を打開して進みうる人間の理想像を探るとともに、体育は、それにどのような価値と意味を与えうるのかを究明しようとするものである。
2. それには今後、体育は、従来の人間を対象とした個別科学の枠内にのみとどまる弊を改め、たえずその本質を問いつづけることによって、体育独自の存在領域を確立しなければならない。
それは、体育が「学」や「教育」を契機としつつ、なお、これを全体として越えなければならない範疇のものであることをも意味する立場にはかならない。
かくしてはじめて体育は、人間理性の「実践原理」を体得した行動的人間の育成を可能ならしめるものとして、光彩を放ちうるものと主張する。

This study attempts to deal with the following problems :

1. The ideal image of man who can break through the present chaotic world.
2. Value and meaning that physical education can give in building such an ideal image of man.

So far the purpose of physical education has been swayed by the demand of times. It has remained one of the sciences of human beings, but it should establish its own existential territory by constantly pursuing its essence. That means physical education is that which belongs to the category which surpasses sciences as a whole with each science and education as its moment.

It should not be a more scientific study of physical exercises, nor building healthy body for the sake of health. Man is more than a combination of organs. He is a thinking being. By philosophising about what is the true value for him and what is good for life, he can have wisdom of finding his way of living.

Thus the purpose of physical education become to foster an active man who has a "practicing principle" of human reason.

(Hideki Zaikokuji : The Groped Image of Man and the Value of Physical Education, *Jap. J. Phys. Educ.*, Vol. 21, No. 5, Jan. 1977, pp. 285~292)

* 愛知学院大学助教授

はじめに

いまやわが国は、内外ともにきわめて憂慮すべき、戦後最大の危機を迎えるに至った。われわれが今後、なおも享楽と消費を求め、“物”から“心”への回帰を忘却しつつづけるならば、80年代を待たずして日本の「自由」「独立」と民主主義体制は、「独裁」か「全体主義」によってその根底から破壊せられ、やがては朽ちた大木が倒れるように歴史から姿を消すであろうことは、想像に難くないところである。

しかしながら、ここ2、3年、ようやくにして、日本人の深層心理と日本社会の歴史の流れの水底において、ごくゆるやかではあるが、“文化復興の兆し”があらわれ始めていることもまた、見逃しえないところである。

そのことは畢竟するに、戦後30年の民主主義的諸改革の価値が根本から問われ始め、とくに、新時代に適応しうる“人間像”の模索が始められていることを意味するものにほかなるまい。それは現代の危機感もさることながら、結局は、われわれに物事の「本質と末しょう」「目的と手段」「本ものと偽もの」を識別する英知が、やっと芽生えてきたことを物語るものといえよう。

かかる歴史的現実に対処するには、まず、われわれは、明治以降、絶対的な価値とされてきた「科学技術文明」と、戦後の「人命尊重」の思想について、今日、あらためてその意義を厳正に問い直さなければならない。そして、そのことによって新しい“人間像”を模索するとともに、さらにそれについて体育がどのような価値と意味を与えるのかを、その本質に照らして解明することであろう。

このことが、「人間」に深いかわりをもつわれわれ体育に携わるもののきわめて重要な今日的使命ではあるまいか。

本稿は、これを目途として考察を試みることにする。

模索する“人間像”

(1) 科学技術文明の功罪

第一次大戦直後、ドイツの思想家シュペングラ

ー(O. Spengler. 1880~1936)が、その著『西洋の没落』において述べている“文化”の不可避免的崩壊は“文明”への移行によるもの¹⁾、との予言は、今日、その正確さを認めざるをえない。また、トインビー(A.J. Toynbee. 1889~1975)が、その著『歴史の研究』で述べている、過去の諸文明没落の原因は、天変地異や外敵の侵入等によるものではなく、それは、その社会の内部的崩壊によるところの“自己決定能力の喪失”にある²⁾、との説もまた、歴史の教訓として今日、われわれがしかと銘記すべきではなからうか。

さらにまた、最近では英国のM・シャックス(M. Shanks. 1927~)が、その著『ゆきづまった社会』において、従来の経済人の“神話”に別れを告げることを、いとも克明に述べているのである³⁾。

それはまた高山岩男が“論文”『世界史の曲り角に立つ日本』で、近代の欧米哲学に共通した“自然の征服”という観念に立った科学万能主義が、生の文明を“死”の文明に追い込んだ⁴⁾、と指摘しているが、たしかに“幸”を築くはずの文明が、“人間性の喪失”を招くに至ったことは、おおうべくもない事実なのである。

わが国にあっても、文明開化以後の科学技術文明の進歩は、たしかに輝かしい成果をおさめ、今日、やっと世界先進工業国の仲間入りができて、その意味では、きわめて高く評価せざるをえないであろう。

しかしながらその反面、科学の名による理性主義、工業化の名による技術主義が、それまでのわが国の情緒的価値体系の上に立った固有文化のいっさいを破壊し、理性万能、技術万能の社会に改変してしまったこともまた、まぎれもない事実である。その要因は、もともと科学が人間を認識の対象としてしかとらえず、また技術も人間を操作の対象としてしかとらえないがため、それらの対象にもなりえない“神秘的な存在”のいっさいを否定し去ったところにあるものと考えられる。したがってこれらを否定することは、いっさいの人間的な麗わしい存在の連関を否定することに連なるものであり、果ては自らの存在そのものを抹殺してしまうことにもなりかねない⁵⁾。それゆえに、かかる

科学技術文明の進歩による副次的弊害は、われわれの英知と自律心でもって、たえず、セルフ・コントロールされなければならないのである。

今日、文化勲章受賞の榮譽に輝いた広中教授が、帰朝後、開口一番「数学の根底は哲学でなければならない」といって、思考の基準としての“哲学”を指摘したが、それは、あながち数学に限らず、現代科学技術文明の野放図な発達を認容する社会に対しての、痛烈な批判として受けとめざるをえない。

かのキケロ (M.T. Cicero. 106~43 B.C.) の哲学のごときも、ローマ人が、当時のギリシャ的人間の人間的崇高さから隔たることの多いことを感じたローマ人の世界の中から生まれたものにほかなるまい。換言すれば、ローマ人が、より崇高な意味における人間であるためには、いかなる目標に向かって努力しなければならないかという問いに対する一つの答えが、それであると見るのである。

キケロにあっては、近頃流行の物理的な力の行使のごときは、動物の行うところであって人間の行うところではない、なぜなら、人間に特有な闘争というのは、相互の誠意に裏打ちされた誓約に対して不正義が生じた場合に、最小限度の正義を守り抜くための戦い以外の何者でもない。前者が動物社会の法則であるのに対して、後者は人間社会に見られる特性であり、そのゆえに後者の特質は、理性と言語共同とを紐帯(じゅうたい)とすることに求められる、と見るのである⁶⁾。

しかしながら今日、ようやくにしてわが国も、“文化的伝統”⁷⁾再認の動きを、たとえば有機農業、柳田国男の民俗学ブームなどによみとることができる。それは、もともと日本の文化が常に“自然”を征服すべき“対象”としてとらえず、それとの共存を基盤としてきた“伝統”によるものと認めざるをえない。それが、今日の無軌道な科学技術文明にセルフ・コントロールの役目を果たしていくためには、これらの芽を貴重な手がかりとして育ててゆかねばなるまい。

さらにまた、およそいかなる国の人々も、自己の属する国の文化的伝統のいっさいを否定して生きてゆくことは、とうてい不可能なことといわざる

をえない。敗戦を契機としてそれまでの文化的伝統への自信をいっさい失ってしまったかに見えた日本人も、結局は今日、その中から明日への教訓を引き出さざるをえなくなったものと考え、これはわれわれが自己の属する民族を、長年にわたって営々として繋いできた“きずな”であり、石田英一郎の表現を借りれば、それは民族のコア・パースナリティ⁸⁾によって支えられているものにほかならない。したがってそれを断ち切ってしまえば、人間は、いつでも砂漠の中へ投げ出されるであろうことを、今日われわれは、しかと肝に銘ずべきではあるまいか。

このことは、和辻哲郎がその著『倫理学』において、「人類を一つの全体に組織しようとする努力は、地上の民族のさまざまな特殊の形成を尊重しつつ、それをさらに一層高次の段階において階和にもたらしものでなくてはならぬ。特殊的内容を捨て去った一様化は人間存在の貧困化であって豊富化ではない」⁹⁾と述べていることに照応するものといえよう。

(2) 問い直される“人命尊重”の意義

以上に見てきたごとく、科学技術文明の弊害は、人間の尊厳性をその根底から破壊しつつけてきたのである。それを人命尊重の思想について、いっそう深く考察してみることとする。

たしかに“生命”のないところには“人格”もない。しかし、“生命”は“物”にまさり、“人格”は“生命”にまさるものなのである。したがって、かかる“人類普遍の原理”に基盤をもたぬ人命尊重の思想は、“弱肉強食”を是認するといふ、きわめて危険な思想にまで発展しかねないものといわねばならない。

かように、人命は人命であるがゆえに尊いものではなくて、その生命以上に尊い何ものかの“価値”が見いだされた場合には、自己の生命をも捨てるという生物であるがゆえに、“人命尊重”の思想が許されるものなのである。それは畢竟するに、人間は生物的存在としての「私」ではなく、法的、社会的存在としての「個」であるという厳粛な「自覚」が、人間にのみあるからである。

古来、「自由」を中核とした民主主義国家にあって、それが「国家」としての独立の基盤を堅持

しえたゆえんのものも、畢竟、それは国民が自らの意志で定めた“法”と“秩序”のほうを、生物的生命価値に優先させてきたからにほかなるまい。かのソクラテス (Sōkratēs. 470~399 B.C.) が、“悪法もまた法なり”とあって、従容(しょうよう)として死についたその“死”も、明らかにそのことを意味する以外の何ものでもあるまい。

それは、ヘーゲル (G.W.F. Hegel. 1770~1831) がその著『歴史哲学』において、「国家の中においてはじめて『自由』はその客観性を獲得するものであり、またその客観性を楽しむことになるのである。というのは、法律は精神の客観性であり、真の意志だからである。したがって法律に服従する意志だけが自由である」¹⁰⁾ と、述べていることから明らかであろう。

現代社会の支配的風潮の中で見失われている最大のものは、とりまなおさず各人が、自己の生命を賭(か)けても達成すべき“価値”というものではあるまいか。今日、一般に見られる“生き甲斐喪失現象”も、結局は、そういった風潮の反映にほかなるまい。それはただちに大衆の思考力、判断力の低下を招き、やがてそれは、社会が自己の支配能力を失ってゆくことにもなるのである¹¹⁾。

以上から科学技術文明の意義は、一面においてきわめて大きな意味を認めながらも、その代償として失った“人間の尊厳性”は、それをはるかに越えたものであることを知るのである。したがってそれを回復するには、今後、戦前・戦中・戦後のすべての人々が、文化的伝統の再認によって、「人間」のみが有する最もすぐれた倫理的自己規制の機能を働かせる以外にはないということになる。

かくして、はじめて文明史的転換期に適應できる人間の育成も、実現の可能性が期待できるものと考ええる。

次に体育は、それについてどのような効果を及ぼしうるのかを問うこととする。

体育の価値

(1) 体育の「学問」的意義

私は、体育の本質は、人間行動の正しい実践原

理¹²⁾の体認にあるものと信ずる。

従来、体育がその時々社会状況によって、他律的に目的を付与せられてきたことは、体育史や体育思想史の雄弁に物語るところであるが、それは、いつ、いかなる社会や所与の環境のもとであっても、人間としての正当な実践原理を確立するという「自己目的」を体育が把握しえず、「何のための健康か」を忘れ去り、「健康のための健康」のごとく、いわば、目的(本質)と手段の逆転によるものと思わざるをえない¹³⁾。

換言すれば、それは同時に体育が、「学」として独自の領域を確立しえず、「身体」や「身体運動」の法則を、自然科学的、または社会科学的に究明する領域から飛躍することができなかったために、「学」と「実践」とが乖離(かいり)していることに照応するであろう。

それが戦後においても体育即スポーツ、また、昭和44年度の小・中・高の学習指導要領改訂に見られた総則「体育」においても、体育即体力づくりの観を呈してきたゆえんでもあったのである。それがさらに今日では、それは世界の趨勢だとか、現代スポーツはもはや「体育」の用語概念では括(くく)りきれなくなったからとかの理由で、体育をスポーツの用語概念で包括しようとする動きにまで発展してきたものと考ええる。

そのことを考察するうえで、篠田基行がその著『体育思想史』にて、「体育の方向を誤りなく定め、人類の平和に向って強固な歩み続けるためには、体育を<思想化>し普遍的な理想像を絶えず問い続け、人類平和に反する要請があったときは、勇気をもって反対の行動がとれるのでなければならぬ。思想は方向を誤りなく指し示す行動の指示器である」¹⁴⁾と述べていることなどは、きわめて示唆に富んだ指摘といわざるをえない。

体育が身体運動を媒介することに特殊性を有することは、周知の事実である。この身体運動には身体運動の法則があり、法則はまた、身体運動を媒介としながら、理論的体系的な解明を経て、より合理的な身体運動を喚起する媒体となる。この法則の探究が科学的な意味における「学」を形成する¹⁵⁾。

もとより体育における身体運動の契機が、身体

運動の「主体」についての実践的認識を媒介する点を度外視するのであれば、身体運動それ自体が、ただ「客体」として学的法則の探究に服するにとどまらざるをえないことはいうまでもないところである。ところが、われわれが猿の身体運動を対象とするのでない以上、身体運動の「主体」についての実践的認識を度外視することが許されないのは当然である。ここに体育における身体運動が、単なる科学的意味における「学」、とりわけ自然科学的に把握される対象の枠を越えなければならない必然性がある。体育の「学」の形成は、こうして身体運動の主体が、ほかならぬ「人間」であることの認識から出発すべき契機を含むこととなる。

運動生理学やスポーツ医学等の学問性も、単にそれが自然科学的な法則の確立をめざすものである限りにおいては、それぞれの独自の学問性を有するには違ひなかりうが、ただちにこれらをもって「体育学」それ自体の学問性と同一視できない理由も、ここにあるものといわねばならない。

すなわち体育学は、このほか社会、人文等をも含めての専門分化科学を補助学としながら、これらにその場を与えうる体系的全体学として、何よりも、人間存在¹⁶⁾の実践原理を学の基本として確立しうるものでなければならず、また逆に、体育の実践を通して、これを全体的な体育学の中に体系的に取り込む統一的な学でなければならないものとする。

だが、今日でもまだそれぞれの分化科学は、その枠内に踏みとどまってその中でますます細分化の傾向にあるために、それが体育の本質を忘れ去ったような研究を、数多く派生する要因となっているものと認めざるをえない。

それについて石津誠がその著『体育原理』において、「体育は単なる物質の教育に沈潜すべきではない。統合的な人間教育としての実践的本質を失わずに、実際の真理の把握に向かって進むべきであり、進まなければならないのである。……これを否定するならば、その一切の試みは、必ずや人間的事実の理解を誤らせるに至ると思うのである」¹⁷⁾と指摘していること、また、勝部篤美の東海支部月例研究会における「諸分化科学は互いに

ドッキングして、全体として、人間学としての体育学の研究を志向すべきである。分化に比重がかり過ぎ、総合が軽視されるようであっては、人間学としての体育学の成果は期待できないし、また体育学研究の意味もなくなってしまう」¹⁸⁾との発言等は、きわめて正鵠を得たものといわざるをえない。

(2) 体育の「教育」的意義

さらに、身体運動の主体としての人間は、「教育」されることにおいて初めて「人間」たることをうる特殊な主体的存在である¹⁹⁾。

それは、前頭葉に宿る心を頭頂葉に宿る心で包み込む被教育的存在であるとともに、言語共同を媒介とする民族や人種の観念をも「人間」において止揚する特殊な共同存在でなければならない。その意味では、従来における「教育」が、科学的意味における「学」の教授と教養(Bildung)に満足するのに対して、現代的意味における「教育」が全人的実践教育を意味するものでなければならないことは当然である²⁰⁾。しかも体育における「教育」の契機は、身体運動を媒介としつつその主体が、ほかならぬ「人間」であることを中心とすべきものとする。

しかるに、戦後のわが国における教育は、所詮は、デューイ(J. Dewey. 1859~1952)の人間像を基盤としているもので、それは、児童・生徒中心主義とダーウィン(C.R. Darwin. 1809~82)の進化論との結合によって生じた、いわば19世紀的な自然主義人間像といってよいのではなからうか²¹⁾。すなわち、子供の中には先天的に教育の原則が内在しており、子供は自ら発達し発展していくものであるゆえに、それを手助けするのが教育であるとの考え方と、さらに合理主義に対する信仰、進歩に対する信仰とが相結びついており、理性的、合理的な存在であるといった堅い信念に立たされていたものとみてよからう。

したがって、体育もまたそれにならって、児童・生徒の興味・経験重視のいわば方法手段にのみ意を用いたために、教育基本法に示された教育目的「教育は、人格の完成をめざし……」に沿った体育独自の具体的な目標は、示しえなかったのである。

かように戦後の教育・体育観は、狼少女の例を引くまでもなく、それが動物の教育には適している、ザインとゾルレンが常に矛盾し対立して生きている「人間」の教育には、適さないものといわざるをえない。

それに関して水野忠文が、その著『体育思想史序説』の中での“スポーツは如何にして道德教育に役立ち得るか”の方法論にて、「要は単なる体験主義を否定し、克己体験主義に立つならば、現代においてもスポーツの場を道德教育の場にそのまま移行させることが出来ると考えられるのである」²²⁾と指摘していることは、きわめて当を得たものと認めざるをえない。

そしてまた、そこに見られる東洋倫理思想の「克己」(私慾に打ちかつ意)こそ、体育、教育に限らず、戦後の日本が豊かさの代償として見失ってきた最も貴重なモラルティーであったといわざるをえない。何となれば、それが先にも述べた「個」の自覚、真の「自由」の思想を意味するものにはかならないと思うからである。

それは三木新が、その著『法哲学の体系的契機』において、「自由の精神は、自己を尊厳なものとするがゆえに慾意を断ち、自由な決断によって『小我』を『虚像』の幻影として斬り捨てるところに自己の主体的な生存を誇りうるところ『精神』である。つまり、自己を『捨てる』ことによって自己を『生かす』精神だといってよい。その実践は一重に『覚悟』にかかわるから、『覚悟』は、透明にして充実した『自由の精神』の『自律的決断』を意味する」²³⁾と、述べていることに照応するものと考えられる。

(3) 体育の本質は人間存在の日常実践

このことはまた、体育が現代的意味における「学」や「教育」を契機としつつ、なお、これを全体として越えなければならない範疇(はんちゅう)のものであることを意味するものといえよう。これこそ私が、体育を、人間存在の本質的要請そのものを自己目的とするところの、日常における「正常な実践」それ自体であるとするゆえんである。

このような立場に立つ以上、たとえば、かつてソ連軍のチェコ侵入に際して、ザトベック(E. Zato-

pek. 1922~)やチャスラフスカ(V. Caslavská. 1942~)のとった果敢な行動を、私が「体育」を通じて養われた人間形成の根底的自覚として把握せざるをえないことは当然である。すなわち、そこには、知識の体系としての科学的意義における「学」を超越したところの、またその限りにおいて、単なるイデオロギーが人間を行動に駆(か)り立てるのとは次元の異なったところの、なおまた、一般的な教育的示唆によって引き起こされた行動とは異なったところの、体育によって体得された全人的な「実践原理」の発露があるとみるのである。

今日、体育に課せられている学問的、また教育的な任務も、結局は、かようにあくまでも「人間」の行動の基準たる「実践原理」と結びつくものでなくてはなるまい。また、そうでなければその価値は、きわめて少ないものといわざるをえない。何となれば、「価値」は、価値あるものを生み出すことによって、はじめて「価値」となりうるからである。

われわれは、体育の価値をかように把握し、実践することによってのみ、いつ、いかなる環境のもとにおかれても、正しい実践的認識と正しい実践的行動を断固として執ることのできる人間として「自律」しうるのではあるまいか。

それは浅田隆夫が、「スポーツと人間形成」という論文において、「スポーツ用語とみられる it is not cricket (公正に振舞わない)とか、fair playとか、below the belt (卑怯な振舞いをする)などの言葉は、イギリス人の行動規準を示す言葉であり、また、スポーツが、人間の生活に密接に統合されていることを示唆しているものでもあろう」²⁴⁾と、述べていることとも軌を一にするものといえよう。

さらにまた、かかる“人間像”は、ちょうど西洋ルネッサンス期におけるヒューマンイズムが、思弁の人間像の上位に行動的人間像を置き、しかもこの行動的人間が単なる行為者ではなく、すぐれて道徳的価値の信奉者²⁵⁾であったことに、きわめて高い類似点を見いだしうるのである。

その意味で体育独自の身体運動とこれに伴う精神経験²⁶⁾は、一方では、これらを個々の人間行動

の「日常化」にまで普遍化すべく、他方、この普遍化を母体としつつ技術的にも道徳的にもすぐれた専門的な身体運動の従事者が、そのゆえにこそ、すぐれた人間理性の「実践原理」を体得した行動人として、歴史的現実に対処しなければならないものと考えらる。

そしてまたこれは、いかなる観点からも要請されざるをえない基本的な要請であり、この要請に参与しうる独自の領域を体育が担わなければならないことを、今日ほど声を大にして叫ばなければならない時機はないのではあるまいか。

む す び

私が、本稿に表記のテーマを選び、それについての究明を試みるに至った動機は、おおよそ次のごとき事情によるものである。

それは、現代の社会の体質が、高度成長の終息や自然破壊の中できわめて衰弱しきったものであることから、われわれにもまた、われわれ自身の生き方、毎日の行動にその正しい対応を強く迫られているという認識がない限り、新時代を築きあげていく人間の育成も、至極、困難であろうとの憂慮からである。

さらにそれに加えて戦後30年の日本の体育は、社会の変革とかもろもろの事件等について、あまりにも無関心でありすぎはしなかったかという猛省とによったものである。

それについて体育は、従来の興味・経験重視の消極的な人間の育成から、今後は、自己の本能や欲望等を自ら統制統御しうる積極的な人間の育成に、ただちに思想の転換をはかるべきではあるまいかなどの問題を提起したいがために、それらをあえて本稿にしたためて世に問うた次第である。

しかしながら、今日的社会に巣くう人間の病根や、また体育の価値が今日でもなお過少評価されざるをえない根本的要因等についても、切込みが浅いためにテーマの問題点を大胆に整理して、改革と前進の方向づけを具体的に開陳しえなかったことは、率直に認めなければなるまい。

この点については今後の課題として、いずれ稿をあらためて執ように考察をつづけてゆく所存である。

以 上

引用・参考文献及び注記

- 1) Spengler, 村松正俊訳：西洋の没落（2巻），五月書房，pp.75～158，1975.
- 2) Toynbee, 長谷川松治訳：歴史の研究（1巻），社会思想社，pp.454～533，1969.
- 3) Shanks, 江間・田井訳：ゆきづまった社会，至誠堂，pp.252～303，1968.
- 4) 高山岩男：世界史の曲り角に立つ日本（「世界と日本」15巻5号），p.16，1975.
- 5) 拙稿：民族の命運と体育の使命（「新体育」44巻6号），p.38，1974.
- 6) 三木清：哲学ノート，雪華社，p.227以下，1948.
- 7) 会田雄次は，「この豊かで美しい国土の上に築きあげた古い，この上なく優美な，そして力強い文化を再認識したり，東西古今のあらゆる文化を受け入れ，自分のものとした力強い日本の過去を知ることは，私たちの将来への自信を作ることになる」と述べている（会田雄次，「伝統への復帰をめぐる」日本文化への直言所収，人物往来社，p.157，1967.）.
- 8) 石田英一郎は，「日本人と西洋人との生き方の本質的な差異が，日本社会の封建性とか先近代性とかいう公式で割り切れるものならば，話は簡単なのだが，どうもそうではなさそうなところに問題はあった．それは何かそれぞれの個人の個性，ことにコア・パースナリティといったものにも似た，個々の文明に内在する核心的な，なかなか変わりにくいあるものに根ざしているらしい」と述べている（石田英一郎，「私の日本発見」人間と文化の探求所収，文芸春秋社，p.13，1974.）.
- 9) 和辻哲郎：倫理学（上巻），岩波書店，p.593，1968.
- 10) Hegel, 武市健人訳：歴史哲学（上巻），岩波書店，p.71，1965.
- 11) 拙稿：問い直される生命の価値（「愛知学院大学論叢一般教育研究」22巻4号），p.142，1975.
- 12) 一般に，実践するさいにのっとるべき規範（「実践的理念」哲学事典），平凡社，p.516，1969.
- 13) 拙稿：体育の理念についての一考察（「新体育」39巻6号），p.121，1969.
- 14) 篠田基行：体育思想史，逍遙書院，p.105，1975.
- 15) 永野芳夫：論理学，p.279以下，1947. なお科学の限界につき，中谷宇吉郎：科学の方法，p.18以下. scienceの本来的性格につき，Bernal, 長野・鎮目訳：歴史における科学，みすず書房，p.567以下，1956.
- 16) 哲学的人間学および実存哲学の主旨からみた人間の

- 存在をいう。人間存在は人間の世界存在をも人間の自己存在をも包含する。人間存在は一面には生物学的、心理学的に、他面には歴史的、また社会学的に、相当の程度まで認識されうる（「人間存在」哲学事典，平凡社，p. 907, 1969）。
- 17) 石津誠：体育原理，道和書院，p. 10, 1969.
 - 18) 勝部篤美の日本体育学会東海支部月例研究会における発言要旨，1975，6，22.
 - 19) 時実利彦：塾の精神（「自由」11巻7号所収），p. 11, 1969.
 - 20) 加藤橋夫も，体育における従来の教育内容が，「保健衛生の知識の教授と身体訓練を主とする体操が主要なものであった」と認めたうえ，「しかしながら，近年における体育はこのようなものではない」とし，「その考え方の背景となっているものは，人間を精神と身体の一統体とみる全人教育の思潮である」としている（加藤橋夫：保健体育学講座，日本体育学会編1巻，p. 23, 1967）。
 - 21) Dewey, 帆足理一郎訳：民主主義と教育，春秋社，pp. 101～139, 279～290, 1974. 稲富栄次郎：現代の教育哲学，福村出版社，pp. 223～241, 1966.
 - 22) 水野忠文：体育思想史序説，世界書院，p. 119, 1968.
 - 23) 三木新：法哲学の体系的契機，恒星社厚生閣，p. 38, 1974.
 - 24) 浅田隆夫：スポーツと人間形成（「体育における人間形成論」体育の原理3号，体育原理研究会編），p. 43, 1967.
 - 25) 加茂儀一：ルネッサンスの人間像（「ヒューマニズムの史的展開」所収）宝文館出版，pp. 136～140, 1969.
 - 26) 高部岩雄は，「汗にまみれ土によごれ，水を浴び風を切るというような行動の精神への影響，試験場面の緊張と意欲，あるいは共感，感激というような情動の激しさ，強さ，こういう精神経験を，読書とか実験とかいう教育経験の中で味わうことは比較的少なく，体育独得の精神経験であるように思われる」と，述べている（高部岩雄：意志力について，体育における人間形成論所収，体育の原理3号，体育原理研究会編，p. 132, 1967）。